

2019. 8. 18. 聖霊降臨節第11主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書4章31-44節

『力ある言葉』

主イエスの宣教の始め、先週、先々週と、主の郷里ナザレでの宣教とその反応に聞いてまいりました。

郷里ナザレではいきなり人々と激突、ナザレ人は憤り、殺されかねない状態にまでなったのです。

けれど主はそれによって宣教を中断することもなく、他の町に移動し、そこで福音を宣べ伝えていかれました。カファルナウムは主イエスにとって折あるごとに立ち寄る親しい町といってもいい所でした。

カファルナウムの会堂で主イエスの説教を聞いた人々は、ひじょうに驚きました。ナザレの町でも主の言葉を聞いた人々は、驚いた、とありました。しかしカファルナウムの人々は、たんに驚いただけでなく、その言葉に権威がある、と感じたことが記されています。ナザレの町の人たちの反応とは違っていました。権威ある言葉とはどういう言葉なのでしょう。話が上手だとか、雄弁だ、というようなことと違うことはわかります。説得力があるとか、情理を尽くしている、ということだけで、権威があるとは言いません。では、権威ある言葉とは何なのでしょう。

その会堂に汚れた悪霊にとりつかれた男がいて、主イエスに向かって大声をあげてこう叫んだのです。「ああ。ナザレのイエス、かまわないでくれ。われわれを滅ぼしに来たのか。正体はわかっている。神の聖者だ。」

悪霊にとり取りつかれている男の口を通して、この男の中にいる悪霊が叫んだということでしょう。悪霊は神と人間とを切り離すことが使命。それが自分の役割。

悪霊は人間が神なしで生きていくよう誘う。悪霊にとりつかれたものは、悪霊の言葉は、自分の言葉だ、と思っている。

悪霊の働きが体に深く浸み込んでいる、ということです。

悪霊は、わたしたち人間よりももっと鋭敏に神の働きを感じます。自分の使命や役割の前に立ちふさがり、その働きを阻止するものだからです。今ここで、会堂内におとなしく座っていた男の中の悪霊は、イエス・キリストの正体を誰よりも的確に、すば

やく見抜き、怖れたのです。ああ、ナザレのイエス、かまわないでくれ。かまわないでくれ、というのが悪魔の心からの叫びです。ほっといてくれ。さらに言えば、人間にかまわないでくれ。人間をほっといてくれ。そうすれば、俺たちは俺たちで落ち着いて仕事ができる。こうやって会堂に来て、神の話を聞き、礼拝している気分にもさせる。だからかまわないでくれ。お前の正体はわかっている。神の聖者だ。神の者だ、と言っているのだから、まさしく悪霊はイエスの正体を知っている。

主イエスは「黙れ。この人から出て行け」と叱りつけられました。すると悪霊はその男を人々の中に投げ倒し、何の傷も負わずに出て行った。悪霊はイエスの正体を人間よりも正確に見抜いたのです。つまりイエスの力も働きも自分たちにとっていかに脅威か、ということを知っている、ということです。悪霊は主イエスの言葉の力も重さも知っていたのです。

悪霊は主イエスの言葉に直ちに従っている。これはここを読んで、あらためて驚かされることです。ナザレの人々は主イエスの言葉を聞いて、「この人はヨセフの息子じゃないか」と言って、イエスのことを不審に思った。訝しんだ。ナザレの人はイエスが神の聖者だとは認めなかった。だからその言葉に従うどころか、反発し、憤慨した。ところが悪霊は主の言葉に従っている。

もちろん悪霊が従ったという場合の従うは、感謝と喜びのうちに従うということとは正反対で、その力の前に恐れをなして、退散し、しぶしぶ、いやいや従った、ということでしょう。だが悪霊は主イエスの力を知っている。主イエスの言葉の力を知っている。これはわたしたちがここで受けとめておく必要のあることです。

人々は皆驚いて、互いに言った。「この言葉はいったい何だろう。権威と力とをもって汚れた霊に命じると、出て行くとは。」

カファルナウムの人々は、会堂の中で起こったこの出来事を見て、本当に驚いた。この人の言葉は悪霊を追い出す権威と力がある。そう人々が互いに話した、ということです。

権威ある言葉、力ある言葉とは何なのでしょう。そのことを抽象的に考えるのではなく、この場面から聞き取っておきたいと思うのです。

悪霊は自分の働きの前に立ちふさがり、自分の働きを退けようとする神の力を神の存在を感じていました。だからこそ主イエスが会堂に入ってきて、話し始めると、その言葉の力を敏感に感じたのです。主イエスの説教は 31 節以下には記されていませ

んが、それはナザレの会堂で語ったものと内容的には同じだったでしょう。神がわたしを遣わされた。それは囚われている人に解放を、圧迫されている者に自由を、主の恵みを告げ知らせるためだ。神は人間の救いのために、御子を遣わす、という意志を示され実行した。神が罪人の救いのために動いておられる、働いてくださっている。そのことが会堂で語られたのです。悪霊は主イエスの言葉には、神の意志と決断と実行があることを受けとめている。主イエスの言葉は神に由来する言葉だということを感じているのです。

カファルナウムの人たちは、会堂で主イエスの説教を聞いた。だが、まだ主イエスがどのような方で、どう自分たちとかかわり、何をされる方なのか、まだよくわからない。けれどもカファルナウムの人たちは、主イエスの言葉には権威があると感じているのです。主イエスは律法学者のような学識とか、知識の量で、権威を感じさせたのではないでしょう。それは、敢えて言えば、主イエスの言葉の背後に、神の働きを感じる、そういう神から来る権威、自分たちに働きかけ、迫ってくる神の意志、思い、熱情、それが主イエスの言葉から感じられたのでしょう。主イエスの言葉の権威とは、神さまの支配のことです。この世界は神のまことの支配の中にある、そのことの持つ権威なのです。しかもそれは理屈とか、単なる教えではなく、生きて働く神さまの支配、神さまの働き、その中にわたしはあるんだ、と受け取らせるものです。囚われている人が解放され、目が見えなくなっている人の視力が回復し、押さえつけられている人も解放される、そういう神の恵み支配がやって来ている、その告げ知らせの中に神の権威を、神の力をカファルナウムの人たちは感じ取ったのです。

権威という言葉は様々な形で用いられる言葉です。しかし、聖書が語ろうとする権威というのは、根本的に人を従おうとさせるものです。この言葉に従っていこう、とさせるものです。この言葉に導かれ、この言葉についていこう、と人をさせるものです。カファルナウムの人たちは、最初に主イエスの言葉の権威を受けとめ始めた人たちだった、と言えましょう。さらに、主イエスの言葉によって、悪霊に取りつかれた人の中から悪霊が出て行く様子を見て、その言葉の権威と力を強く感じた、ということです。

権威と言われてもピンとこない、という人も少なくないかもしれません。実際ナザレの人々は、主イエスの言葉を聞いて、驚くことはあっても権威を感じてはいないのです。学問的権威や、組織上の権威であれば、目に見える形が姿があるのですが、主イエスの権威は目に見えるものではなかったのですからわからない、感じないという人がいても不思議ではありません。しかしわたしたちは今日の聖書箇所から示さ

れるのは、主イエスの宣教の始め、主の言葉を聞く者の中から、主の言葉の権威と力を受け取る人が出てきた、ということです。主イエスは神との関係の中にある神の独り子。神の意志、神のみ心を体現する独り子です。

人間の師弟関係ですら、先生との深い交わりの中で歩んでいる弟子が、先生の考え方、生き方、その言葉が重なり合ってくる、ということがあるのです。まして、神と主イエス・キリストにおいては、豊かに重なり合い響き合い、呼応しているのです。主イエスの言葉、歩み、を心静めて見聞きする者は、そこに神の働き、神の意志を聞き取り、権威と力を感じ始めていく。権威という言葉がよくわからなくとも、権威ある言葉とは、その言葉にわたしが聞き従っていきたい、行こう、とさせるもの。したがって、本人の自覚無自覚にかかわらず、キリスト教信仰というのは、主イエスの言葉を、たんなる言葉として聞くのではなく、権威ある力ある言葉として聞く、ということに他ならないのです。カファルナウムの人々がそうであったように、主イエスの言葉を聞いて、その言葉の力の前に驚くものとされていきたいと思うのです。

D a t a : 聖霊降臨節第11主日礼拝式説教

讃美 : 前57、後401

新生教会礼拝堂